

書物と読者をつないだ 明治期の販売目録

ねがわ こうきゅう
—願クハ購求アランコトヲ—

はじめに

明治期に入ると、人々の移動と職業選択が自由になりました。学問による立身出世の夢が人々をとらえるようになりますが、それは『学問ノススメ』や『西国立志編』といった書物によって植え付けられたものでした。新しい時代に適応するための知識を、人々は争って求めるようになります。出版社もその要望に応え、多彩な出版物を提供しました。

そのような読者と出版物のなかだちとなったものの一つが出版物の販売目録です。

ここでは、販売目録と出版地から遠く離れた地方における読書の営みとの関わりに焦点を当て、3つのパートに分けて、目録や雑誌をご紹介します。明治期の人々の知識欲と書肆の商魂を感じ取っていただければ幸いです。

- (1) 総合的に書物を取り扱う書肆から特定のジャンルの書籍を扱う書肆までの各種販売目録
- (2) 地方書肆の販売目録
- (3) 娯楽として人気があった文芸書の販売目録

新聞は早くから出版広告を掲載していました。その数は多く、明治期の新聞広告の半ばを出版広告が占めていたと言ってもよいでしょう。新興の書肆(しよし…書物を出版したり売ったりする店。書籍商。書店。)が次々と生まれ、著作権などの法律が整わないこともあって、明治20年頃までの出版界は投機的な様相を呈していました。

「東京日日新聞」

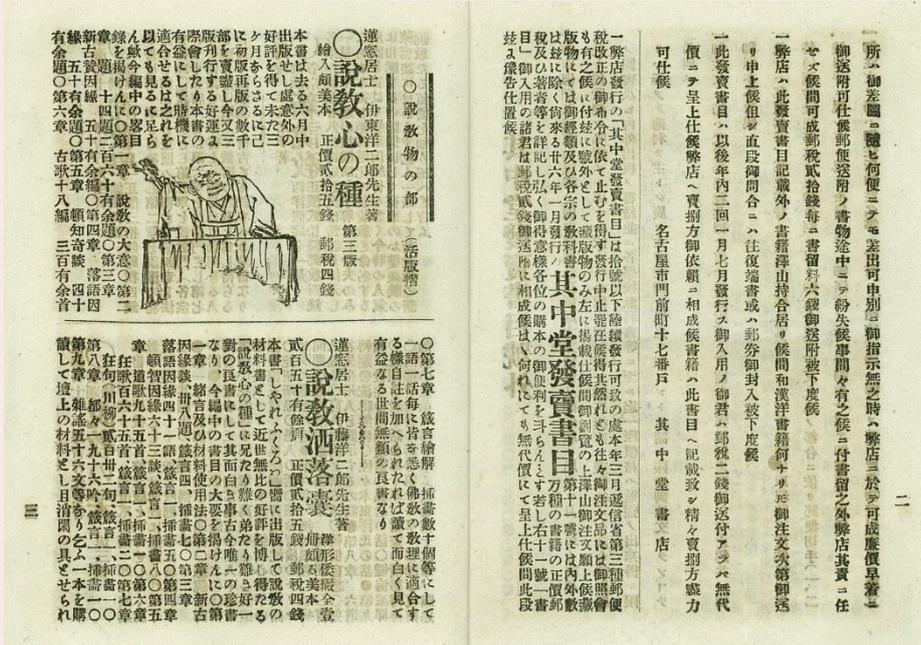
1886(明治19)年11月25日

古洋服、印刷、飴、歯科、語学教授など各種の広告に交じり、出版広告が多数見られる。



ジャンル: **仏教** 其中堂(きちゅうどう)

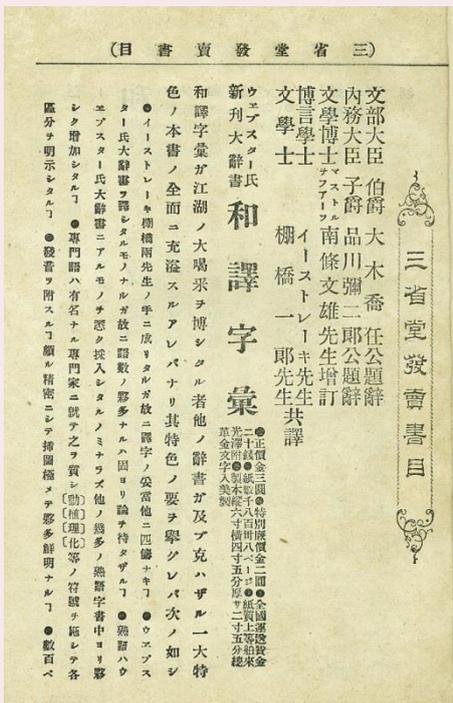
其中堂は、仏教書を中心とした出版および新古書の販売を行う名古屋の書肆で、京都にも店舗がありました。其中堂は毎年発売書目を発行していましたが、本号は第三種郵便許可規定の制定にともなって発行を一時見合わせていた時期に出た号外です。



『其中堂發賣書目号外』
其中堂、1892(明治25)年
(上)表紙。
(左)説教物の部。
千代田図書館所蔵
「古書販売目録コレクション」
【書店別 1-181-1258】

ジャンル: **語学** 三省堂書店(さんせいどうしょてん)

三省堂書店は、語学書を中心に出版・販売を行っていた出版社であり、印刷所も経営していました。「辞書の三省堂」として現在も有名です。



『發賣書籍目録』
三省堂書店
1891(明治24)年
(左)『ウェブスター氏新刊大辞書』は明治21年に三省堂が発行して、明治中期の英学界を風靡した辞書。当時の看板商品として、目録の1ページ目に堂々記載されている。
(右)表紙。
千代田図書館所蔵
「古書販売目録コレクション」
【書店別 1-182-1684】

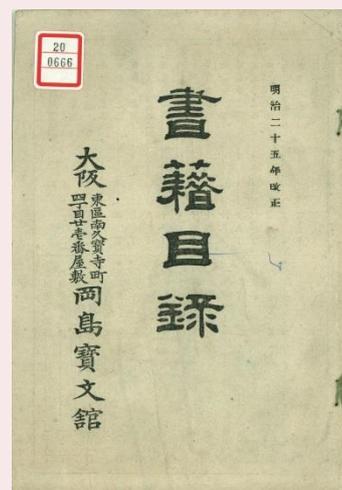
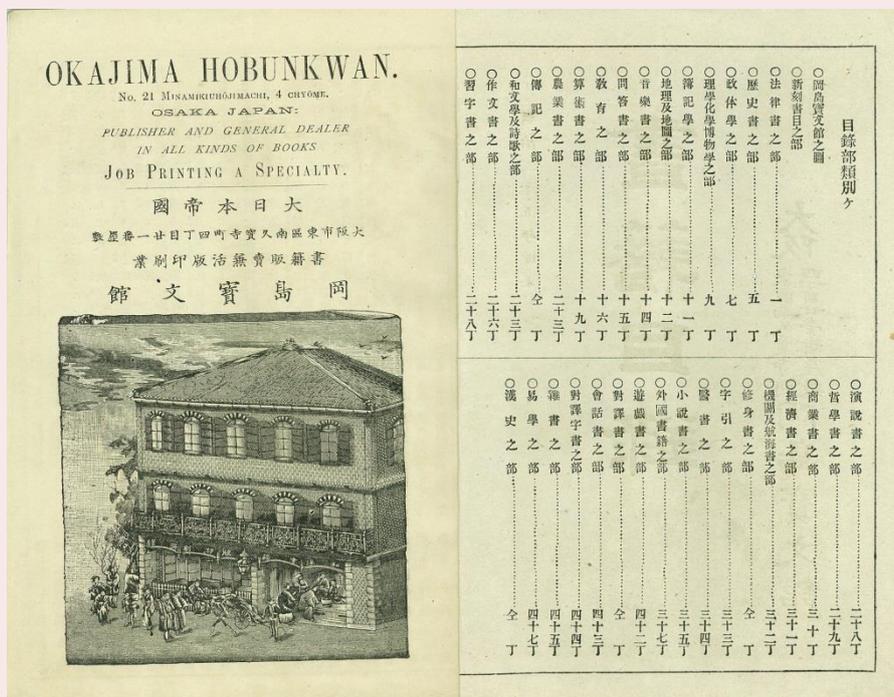
パート(2) 地方書肆の販売目録

大阪 ⇒ **全国** 岡島宝文館(おかじまほうぶんかん)

岡島真七が上方書肆の一大勢力であった河内屋の別家として創業しました。書籍出版販売の宝玉堂、新聞雑誌取次の岡島支店(現在の岡島新聞舗)、印刷所の宝文館の三部門を備えており、本書は印刷所・宝文館の目録です。宝文館は真七の次男・幸治郎が経営を任せられ、煉瓦造り三階建ての店舗を構えていました。書籍のほか印刷機器なども販売されていたようです。

新聞雑誌取次部門の岡島支店は、出版社・博文館の「大売捌所」として記載されています(参照:2 ページ目掲載『日本大家論集』十四編)。このように、地方の有力な書肆は、東京の大手出版社と売捌契約を結び、地域の人々へ書物を届ける役割を担っていました。

また、岡島グループの書籍は大阪から全国に流通し、海路北海道の江差まで届いていました。北海道江差町の関川家文書の中に、明治初年代に購入された岡島の書籍があります。



『書籍目録』
 岡島宝文館、1892(明治25)年
 (上)表紙。
 (左)目次。隣には、煉瓦作り3階建ての店舗が描かれている。
 千代田図書館所蔵
 「古書販売目録コレクション」
 【書店別 1-20-666】

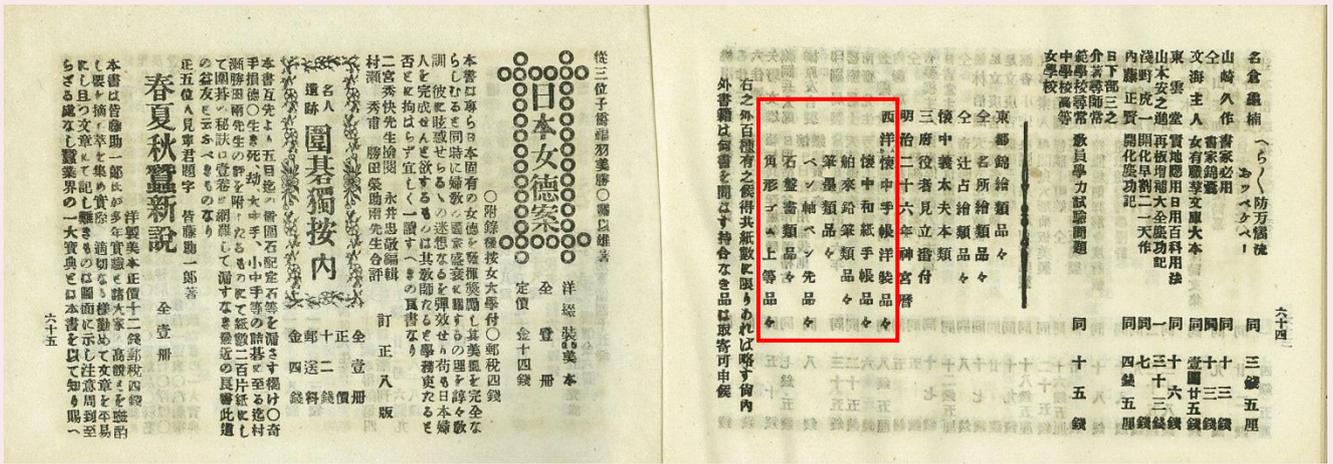
甲府 ⇒ **甲府** 柳正堂書房(りゅうせいどうしょぼう)

現在も続く甲府の書肆で、出版事業や文具の販売も行っていました。地方書肆は書籍や文具の販売のほか印刷所などを兼ねていることが多く、地域の文化活動を物質的に支えていました。

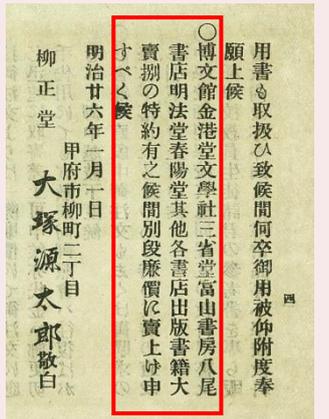
目録には、幅広い分野の書籍が掲載されています。

『発売書目』 柳正堂書店、1893(明治26)年
 表紙。
 千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」
 【書店別 1-181-4798】





『発売書目』 柳正堂書店、1893(明治 26)年
 (上)「懐中和紙手帳品々」「ペン軸ペン先品々」など、書籍だけでなく文具なども取り扱っていたことがわかる。
 (右)博文館をはじめ、大手出版社との特約があることを記載。
 千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【書店別 1-181-4798】



地方書肆は、地域の多様なニーズに応えるために多くの出版社の売捌書肆に名を連ねました。柳正堂はこの目録で、博文館・金港堂・文学社・三省堂・富山房・八尾書店・明法堂・春陽堂などの特約店を名乗り、価格面で便宜があるとしています。先に紹介した岡島支店と同様に、博文館の「売捌所」として『日本大家論集』に記載されています(参照:2 ページ目掲載『日本大家論集』十四編)。

東京 ⇒ 青森

兎屋(うさぎや)

兎屋は明治十年代から十年代にかけて、新聞を利用した派手な出版広告と安売り合戦で名を馳せた投機的な出版社です。明治十年代になると地方でも出張販売を行いました。これは、青森の地方新聞に掲載された青森での出張販売の広告です。

「東奥日報」
 1889(明治 22)年 1月 23日
 青森・大町三丁目の佐藤準助氏宅を会場に、兎屋が7日間の出張販売を行う旨が記載されている。おそらく佐藤氏は、書籍の出張販売に場所を貸し出すことができるような屋敷を持つ、商家など地元の有力者だろうと考えられる。



おわりに —地方における読書の営み

明治維新が起こり、日本人の置かれた環境ががらりと変わりました。新しい時代に適応するための知識を、人々は争って求めるようになります。出版社もその要望に応え、多彩な書物を提供しました。都会の人々はそれらを享受したことでしょう。

しかし、情報と流通の事情が現代とは全く異なるため、地方における読書の営みも都会と比べて、大きく異なる状況でした。銀行振り込み制度も、宅配便も、大型書店もありません。地方の読者は、まず「どのような書物が発行されているのか」という情報を手に入れる必要があります、つぎに「どのようにすればその書物を手に入れることができるのか」という流通の壁を越える必要がありました。そのような時代において書物と読者をつなぎ読書の営みを支えた、書物の販売目録をご紹介します。

千代田図書館蔵「古書販売目録コレクション」のご利用について

- 古書販売目録コレクションは、通常は閉架書庫に保管しております。
- どなたでもご覧いただけます*。詳しくは図書館職員までお問い合わせください。
- 検索には、図書館ホームページ内「古書販売目録検索システム」をご利用ください。

※一度に10点以上を閲覧する場合は事前の申請が必要です。
※資料の劣化や整理作業のため閲覧いただけない場合があります。

企画展示 書物と読者をつないだ明治期の販売目録

—願クハ購求アランコトラ—

2011年10月24日(月)～12月24日(土) 千代田図書館 9F ミニ展示コーナー

主催：千代田図書館・大妻女子大学国文学会（木戸雄一氏：大妻女子大学文学部日本文学科准教授）

本資料は展示の内容をもとに作成しました。無断転載はご遠慮ください。